



春学期の全学必修、情報リテラシー演習の中級を担当。授業中に怒ることも特になく、優しい印象の先生である。授業もすぐくのびのびとやらせてもらった。学科で受ける授業なのでみんなとも仲良くできてすぐ好きな時間だった。鈴木先生は暖かい春の陽気とセットでイメージが浮かぶ。

上智大学文学部新聞学科卒業。

上智大学大学院文学研究科博士課程

(新聞学科専攻) 単位取得満期退学。博士(新聞学)。

公立中学校で社会科を非常勤で教えた。日本新聞協会研究所勤務。



東京のお父さん 鈴木雄雅先生

「東京のお父さん」一地方出身の学生から言われるそう。やはり優しく見守ってくれるからだろう。「これでも昔は短気だったんですよ(笑)。それでも、学生のためを思って厳しくしなければと思うときは厳しく接しようと心がけています。」まさに「お父さん」だと思った。鈴木先生はよくO型だと学生から間違われると笑う。実際は、「典型的なA型」らしい。「(それは)性格的なものが原因なのではないか」。先生にとっての宝物とは?この質問に、先生は答えた。「失ったら嫌なもの考えると、女房であり家族ですね。もしいなかったらどうやって自分は生きているんだろうと考えてしまいます。」そうはっきりと言いつける先生。きっとご家庭でも素敵なお父さんなのだろう。

Q 新聞学科とは?

A 伝えるということがいかに難しいかを勉強する学科ですね。「新聞学科は全体的見て中々面白い学科だと思います。一言で言うなら「ユニーク」ですね。新聞学科って、伝えるということがいかに難しいものかを勉強する学科だと思います。マス・メディアは世の中のことを正しく伝えるものだけど、実際には伝えようと思ったことが全く予想しない形で伝わってしまうこともあります。受け取った情報が少なすぎてよく分からないこともあるでしょうし、逆に多すぎて混乱してしまうかもしれません。

情報を正しく伝えることは、人が生きていく際に実践的に役立つことではないでしょうか。また、そうしたコミュニケーションの難しさを学ぶので、学生にもユニークな部分を持ってほしいですね。学生は元々みんなユニークさを持っているはずなので、そういうところを上手に伸ばしていけばいいのではないのでしょうか。

「大学に入り、それまで自分が持っていた価値観とは違う価値観と出会った時に、そうした価値観を認めた上で社会を考えていってほしいです。「こうでない」とか「目」という縛られた価値観で見るのではなく、また第三者の価値観にただ迎合するのではなく、他の価値観を柔軟に認めて欲しいです。優しい人は現在多くなったと言えますが、

そういう「優しさ」と「認める」ということは同じように見えて違うことだと思います。異なる価値観でも認めることで、自分の価値観を広げて成長できるのではないのでしょうか。」